

ハマフエフキの中間育成標識放流指導 (中城湾沿岸漁業振興推進協議会)

多和田 真 周

1. 現 状

中城沿振協(11市町村・8漁協で構成)では魚類(チンシラー・ハマフエフキ・カンパチ)の中間育成標識放流を平成3年度から毎年継続して実施している。その結果、標識魚が漁獲されるようになり、漁業者の栽培漁業に対する認識が高まりつつある。しかし、種苗の不足、中間育成技術者の不足により、安定的かつ大量放流種苗の確保ができない状況にある。

2. 目 的

中間育成技術全般の指導

3. 協力者

栽培漁業センター・水産振興課

4. 経 過

平成6年度は中間育成場所を中城浜漁港内で実施することになった(飼育管理も同様)、県栽培漁業センターからハマフエフキ種苗の供給が可能となったことから普及所に指導要請が有り、早速、沿振協事務局、中城支所と調整、種苗の受け入れ準備を進める。

海面中間育成施設(7m×7m・4面)は7月11日に板良敷漁港から約2時間かけて曳航、中城浜漁港東側に係留固定した。ハマフエフキ種苗の放養は8月18日に県栽培漁業センターから活魚水槽により輸送、漁港岸壁から海面中間育成施設まで約100m(直径2インチ)のビニールホースをのばして流し込みにより約5万尾(TL20mm)の稚魚を2面の小割生簀に放養して中間育成を開始した。放養後の稚魚の状況は水表面上で活発に遊泳、一部、摂餌する稚魚もあり、斃死魚は観察されなかったことから流し込み作業に時間をかけたことが良好な結果につながったものと思われる。

飼育管理については佐敷中城漁協組合員の浜田氏が委託、ハマフエフキ放流まで、3~4回/日の給餌、生簀網・ロープ類の点検、日々の観測や飼育日誌の記帳、生簀網の交換等、当初はとまどいもみられたが、研究熱心なところも発揮し持ち前の頑張りで約3ヶ月間奮闘していただいたおかげで大きな斃死事故もなく無難に業務を遂行してもらった。

飼育期間中、特に注意したことは酸欠による斃死事故である。夏期の高水温、漁港内ということで水深が浅い事、海水の濁りが大きいことによる酸素量の不足が考えられることから7~10日間隔で生簀網を交換したことにより生簀網内の海水が淀まないようにしたこと、適正な給餌量の遵守に務めた。

成長については、放養後35日目でTL 5.5 cm、50日目でFL 7.5 cm、70日目ではFL 9.2~9.8 cmに達し順調な成長を示した。10月26日には中城浜漁港市場において中城沿振協傘下会員71名の参加人員により午前9時から午後3時までハマフエフキの鰭抜き作業を実施した。作業内容としては、稚魚の取り上げ→麻酔→右腹鰭抜き→薬浴→計数→小割生簀収容の順序で行い、併行して尾叉長測定は2面の小割生簀について実施した。

なお、南部まつりの関連で10月6日に中城浜漁港から海上ルートにより板良敷漁港内にハマフエフキ稚魚を輸送、与那原中学校3年生35名により社会科の課外活動としてのハマフエフキの鰭抜きを体験させ(1,888尾・FL 7.5 cm)、あわせて中城湾における栽培漁業の現状について中城沿振協事務局長から説明があった。標識魚は10月16日に馬天小学校5年生100名により、馬天港地先において放流された。

鰭抜き作業当日の尾叉長測定結果ではNo 1小割生簀は平均で9.25 cm、No 2小割生簀は平均で9.89

cmであった。鯖抜き尾数はNo.1小割生簀は23,502尾、No.2小割生簀は14,715尾で計38,217尾、馬天港地先に放流された数量を合計すると40,105尾で今回のハマフエフキ中間育成歩留まりは80.21%となり、かなり良好な結果を示した。高歩留まり及び順調な成長を示した要因としては、天候に恵まれたこと(台風の襲来、接近がなかった)、管理責任者や協力組員が飼育方法の指示を遵守したことがあげられる。

放流については11月10日に浜比嘉島と藪地島を

結んだ線上の浜比嘉島寄りに3,000尾、11月14日には中城浜漁港南側3.5km沖合い、水深6~7mに20,500尾、中城浜漁港東側2km沖合い、水深2~3mシラヒゲウニ礁近辺に14,715尾を放流した。

中城湾における魚類の大量標識放流は1991~1992年にチンシラーの例があるが、1992年以降漁獲対象のサイズに成長し、その後毎年継続して漁獲され、高い混獲率で推移しているがハマフエフキについても同様の成果を期待したい。